

高校一年

学年テーマ「いのちのネットワーク」

榎本直子・米田 閏一・平松 良行
滝口恵子・大口悦子・長谷川 弘
飯島幸久

1. 学年テーマについて

総合人間科では、「現代の高校生は何を通して人間と社会を理解していくのか」「高校で何を学ぶべきなのか」を根本的に問い直すことを課題としている。高校1年では、高校3年間の導入として、自己の存在意義を社会の中で実感させ、学ぶ楽しさを経験させることを念頭においた。

学校全体での学年テーマの検討により、高校1年では「生命と環境」を扱うことになっている。このテーマのもとに生徒1人1人に野外学習を中心とした個人研究を展開させ、地域社会とのつながり、人とのつながりを形成させながらその中で自分の存在を考えさせることをめざして、学年テーマを「いのちのネットワーク——生命と環境を考える」とした。

「いのちのネットワーク」とは、私たちがタテの（親から子、歴史など時間的）つながり、ヨコの（地域、国、地球の自然環境や社会環境など空間的）つながりといった無数のいのちの連関つまりネットワークの中で生きていることを学び、みんなで支えあって生きていると休で実感することをイメージして名付けた。

また、個人研究とすることで、「生命と環境」を物理・化学・生物といった自然科学や、法律・経済・政治・国際関係といった社会科学、文学・心理学・歴史・教育・福祉といった人文科学、さらに芸術や保健・家庭などさまざまな視点からのアプローチが可能となり、より多くの学問分野を結び付けたり、学ぶ過程での情報や人間の幅広いネットワークを築こうという意図も込めた。

2. 学習方法と学習計画

総合人間科の入門的段階である高校1年では、まず第一に学び方を学び「自己学習力」を育てるために、自らの興味や関心を発掘し一人一人が自分に課す問題を提起することをめざした。

学習方法としては、個人研究を中心とし画一的で受

動的な授業形態を極力避け、学年担任団7人の集団指導をめざして指導教官制を導入した。各生徒に生命と環境という学年テーマにそって自由な発想で個人研究テーマを設定させ、自然や社会、人に学ぶフィールドワークを前提とした研究方法を検討させる。テーマの傾向ごとに20人以下のグループとし、指導教官のもとにグループ内でのディスカッションや情報交換、共同研究もおりませながらの展開を検討している。

本校では15年以上にわたって高校1年で野外学習が実施されており、学年全員同一コース・45人程度3コース・小人数グループ別とさまざまな形態での実践を重ねている。また、附属中学卒業研究・研究旅行集録作成などの経験も持ち、それらをより発展させた形態でのフィールドワークにより総合学習が可能であると考えられる。

1学期には、人やものの研究環境づくり、自己分析（興味・関心の発掘から研究テーマの決定）、研究方法の模索を目標とした。夏休み中の予備調査を経て、2学期にはフィールドワークの計画・実施・報告を行い、3学期に研究のまとめとして論文を作成する予定である。

3. 学年チームティーチング

学年担任団の集団指導を実施するに当たっては、互いの意志疎通を十分に図ることが求められる。毎週の学年会では総合人間科の授業内容、生徒の作業を検討し、同じ報告書用紙を用いてその時間の到達目標を確認している。全体指導の時だけでなく指導教官別のグループ指導の際にも、毎回展開についての打ち合わせを実施し、教官の同一歩調をめざした。各自の指導生だけでなく生徒集団全体を全体でみることが前提であり、学年会では問題生徒を報告し指導方法を討議、研究方法についても情報交換を行う。教科指導と異なり、自分の専門領域を越えた総合的な内容となるため教官間での学習も欠かせない。

指導教官制では1グループ20人以下となり、少人数を対象としたきめ細かい指導も可能である。研究は生

徒の自主的活動を求めるものであるが、特に最初是指針を与え、建設的な方向へ導き、一人一人への助言など指導教官の役割は大きい。学年団が指導方法などの事前の意志統一を図らなければ生徒からの不信感につながる。いかに十分な討議のための学年会の時間を確保するかが課題である。

4. 一学期の実践

「いのちのネットワーク」のネットワークづくり

一年間の個人研究実施に先立って、学びあう集団づくり、まじめに語り合える仲間づくりや考える習慣づくりの中から、自分自身を見つめ個人研究テーマを模索させた。人から与えられるのではなく自らがやる気を出せるテーマをじっくり探るために、書くこと、聞くこと、討論することなどに時間をかけた。

また、とくに総合人間科の意義をしっかりと認識させるために、6月30日～7月1日に行われた林間学校を第1回フィールドワークとして位置づけ、クラス討論や総合人間科の特別授業を盛り込んだ。

〈林間学校での取り組み〉

- ①クラス討論 A組 「宗教とは何か」
B組 「宗教とは何か」
C組 「何のために勉強するのか」

討論に先立って意識調査を実施

- ②総合人間科特別講義 学年担任団からの問題提起
20分×6人

個人研究テーマ決定の参考に

- ・心理学
- ・地球サミットからみる地球環境問題
- ・いのちを見つめる優しい眼差し
ーボランティア活動ー
- ・トイレからの発想
- ・日本人の意識構造 (差別、冤罪)
- ・薬害エイズ
- ・食
- ・都市環境問題 (車とゴミ)

生徒の反応 (林間学校感想文より抜粋)

現在の私は、附属中学に入学した当時よりは自分の意見を言える授業とそれを聞いてくださる先生によって、積極的に意見が言えるようになった。だから「討論会」は私にとって初めての経験であったが、自分の意見をどんどん言えたのはうれしかった。最初は、特に他の中学から入学してきた人達は自分の意見を言わないことが多く、特定の人同士が話し合うようになりがちであった。「ボソボソ言わないできちんと言え」とか、反対であるのに言えない人には「言えない奴が

悪い」と思っていたが、少しでも言おうとする人が出てくると、ちゃんと聞かなければいけないとか、言い易い雰囲気を作ってあげようといった受け入れる気持ちが出てきた。議論が活発になりこれからというところで時間切れとなりとても残念でした。今後機会があったら、ぜひこの続きをやって自分の意見を自由に述べる場所を作ってほしい。今までの林間学校とは一味違う“少し大人になった高校生”の林間学校であった。(M M)

今回の林間学校で一番印象に残ったのは、1日目のクラス討論です。テーマは今オウム真理教が騒がれているせいか「宗教とは何か」というものに安易な気持ちで決まった感がありましたが、しかし、真剣に考えている人はたくさんいて感心しました。この討論のために事前に学習していた熱心な人がいることにも感心しました。

いろいろな意見を聞いたことも参考になり、宗教についてなど考えたこともなかったのもとても新鮮な気持ちで素直にそれらの意見を受け入れることができました。それらは僕にはわかりづらいこともあったけれど、何かしら伝えてくれました。今後このような討論があったら今回よりも積極的にいけるように努力したいと思います。(T K)

総合人間科の先生方の授業は、本当におもしろくふだんの授業とは一味違ってよく聞けました。でも1人の先生の話が20分だったのはとても残念でした。それは、話の中心にはいったところでもう20分になってしまい、一番おもしろくこれから聞きたいところで終わってしまったからです。今度機会があったらぜひ話の続きをうかがいたいと思っています。(Y T)



林間学校 クラス討論の様子

〈一学期内容〉

- ①総合人間科で学ぶこと（オリエンテーション）
- ②附属中学卒業論文報告会
テーマ設定の動機、作成過程
(苦勞した点など)
書き終わったときの感想
- ③自己PR集の作成
関心のある社会問題、理想とする生き方など
「自分を探り、自分を語る」→仲間への影響
仲間からの刺激
- ④個人研究テーマ発表
- ⑤個人研究テーマについてディスカッション
- ⑥夏休み個人研究実施計画書作成
- ⑦教育学部特別講義

〈生徒個人研究テーマ例〉

- 「精神病理学」
- 「EROS～人を恋ふること愛すること」
- 「ささやかな南北問題～アジアを考える」
- 「環境破壊で失われた生命と地球から絶滅した種」
- 「森～トライアートの営み」
- 「学習障害児（LD）について」
- 「ボランティアを通して学ぶもの」
- 「異人の差別問題」
- 「移植～他人からの命」
- 「人の生と死～日本と外国の法律から」
- 「映画のすべて～映画は社会に何を伝えるか」
- 「人間の性とエイズ」
- 「ホット・ソーン～レヘル4のウィルス」
- 「痴呆症～ホケて死ぬ」
- 「エネルギー問題～原子力発電」
- 「国家の危機管理」
- 「スポーツと食べ物について」
- 「人と水」
- 「喫煙者とその周りの人々」
- 「学歴社会に挑む」

5. 今後の課題

一学期は個人研究にむけての準備段階であった。自分の興味にあわせて研究テーマを設定するまでを丁寧
に段階を追って指導していくために一学期間を費やした
といってもよいが、それでも時間的に十分であった
とはいえない。しかし林間学校での感想文から判断
すると、多くの生徒は総合人間科で何を学んでいくの
かそのねらいをきちんと受けとめているようである。

研究テーマの決定と研究計画においては、進行状況
か（予想されていたことではあるが）、生徒による差
が大きい。具体的な計画を練るには、提起された問題

についての基本的な知識が必要でありその不足を痛切
に感じている段階といえるであろう。

今後は、夏休み中に個人テーマに関する基本的知識
を身につけるための文献調査や予備調査のためのフ
ィールドワークを実施させる。2学期の最初に報告会
を開いた後に、11月に予定されている野外学習にむけ
てより発展した展開を考えていく。研究の進んでいる
仲間からの報告を仲間への刺激とし、遅れがちな生徒
の活性化を図ることも必要であろう。「学びあう集団」
での、「脱教室一人と社会から学ぶ」の試みとして
は、2学期からのフィールドワークがその中心であ
り、いかに目的意識を育て内容の濃いものにしていく
かが大きなポイントとなる。自然や社会とのつながり
を念頭におき、文献からではなく人や体験から学ぶ姿
勢を重視し持続的な活動をめざさせたい。そのため
には周回の理解や協力は欠かせないものである。主役
である生徒たちの研究環境を整えるため、教官側は保
護者との連携やフィールドワーク先への対応などに十分
配慮する必要がある。

一人一人テーマも研究方法も異なる集団をまとめ
ながら、各個人に助言を与えるためには、指導教官も
多様な分野についての情報を集め研修を重ねていかな
ければならない。また、集団指導のためにはますます
学年担任団での情報交換や話し合いに十分時間を費や
すことが求められる。（文責 楨本直子）